



心で見える歌劇

岡田 安弘

オペラ作曲家の尾上和彦(78)と知り合って30余年。当時、南都銀行頭取で、奈良の文化活動に力を尽くした故・阪本龍児さんが紹介してくれた。尾上は「主役のホテル代までは賄いきれない。家に泊めることにする」と自宅を新築、あやめ池の賃貸住宅から引っ越した。阪本さんと祝いに行く。新居は彼の祖父の故郷、都祁村への古道に沿っていた。

「子供のころ、ピアノがある祖父の家で育った。楽譜が読めるでなし、我流で簡単な曲をつくり、繰り返し弾くうちに独習の要領がつかめた。近鉄奈良駅に近い椿井市場のパブ「夢吉」で盃を交わしながら思い出話を聞く。

中学の吹奏楽部でピアノを弾きこなす。京都市立堀川高校の音楽コース作曲科で恩師に出会った。恩師はテレビやラジオ番組の作曲も請け負っていた。早熟な才能に目をつけ、仕上がった譜面を楽団のパート別に書き分ける仕事を手伝わせる。「おかげで作曲から演奏までの全過程が見えてきた」と話す。

各地の公演に海外公演が加わり、会えない時期があった。夢吉が平成最後の4月30日に店を閉じた時、久々に電話をくれた。「行き場を失って困っているだろう」と笑う。

17歳で初作品「私は広島を証言する」を発表。原爆詩人・栗原貞子の詩を合唱曲にした。著名な合唱団の定期演奏会で初演されて以来、関西芸術座など劇団からの作曲依頼が相次ぐ。映画監督の山本薩夫から名画「ドレイ工場」の曲を任されたのは25歳。

「ヒロシマ」にこだわった。オラトリオ「鳥の歌」は「8月の祈り」と題して演奏するのが定例。今夏が第35回。残念ながらコロナ禍で合唱練習ができず、来夏に持ち越す。

フォークソングの「竹田の子守歌」が尾上の作というのは、あまり知られていない。東京芸術座の全国公演「橋のない川」の舞台音楽を依頼され、構想を練るため訪れた京都で、歌い継がれていた子守歌に出合う。劇中音楽に書き換えたのがヒットした。

後年は仏教と日本の古典文学をテーマに和魂洋才の志向を強める。伝統的な仏教音楽を学び、オペラ「仏陀」は各地の寺院などで上演が続く。古典文学では源氏物語に取り組む。代表作のオペラ「月の影」は初演から10年、書き始めて17年。納得いくまで譜面を改作。近く名古屋二期会によって披露される予定だ。

兵庫県立芸術文化センターでオペラ「藤戸」を観賞した時、楽屋を訪問した。相変わらずペンで片手にシナリオと譜面を睨みつけていた。舞台は瀬戸内の児島。小舟がたゆとうようなしらべ。尾上の豊かな感性は、有吉佐和子描く源平争乱の世界に連れて行ってくれた。

▽

平氏の水軍を攻めあぐねる源氏の武将、佐々木盛綱。馬で渡れる浅瀬を漁師の子から聞き出す。秘策がもれないよう、盛綱は漁師の子を刺殺。高まる旋律。重い波が崩れ落ちるような母親の怒りの独唱。盛綱は猛々しく歌い返す。「これで二度と戦は起こらぬ」。母は一步も引かない。盛綱は突然、ひれ伏し「仇を討て」と刀を差し出す。母は「おぬしを殺しても我が子は還らぬ」と嘆く。

米国公演で、全米国際オペラ協会が「世界の一級品」と称賛。欧州公演では「心で観るオペラ」と評価された作品だ。あらためて戦争の愚かさを胸に刻む。

その日、TVはウクライナ政府軍と親ロシア派の内戦激化を伝えていた。ウクライナの老婆の顔に刻まれる深いしわ。「平和以外、何もいらぬ」。ポツリと語る老婆。息子を殺された瀬戸の母親の声に重なった。